

詩 集

見在れざる人

中 川 一 政 著

叢 文 閣 版



詩集

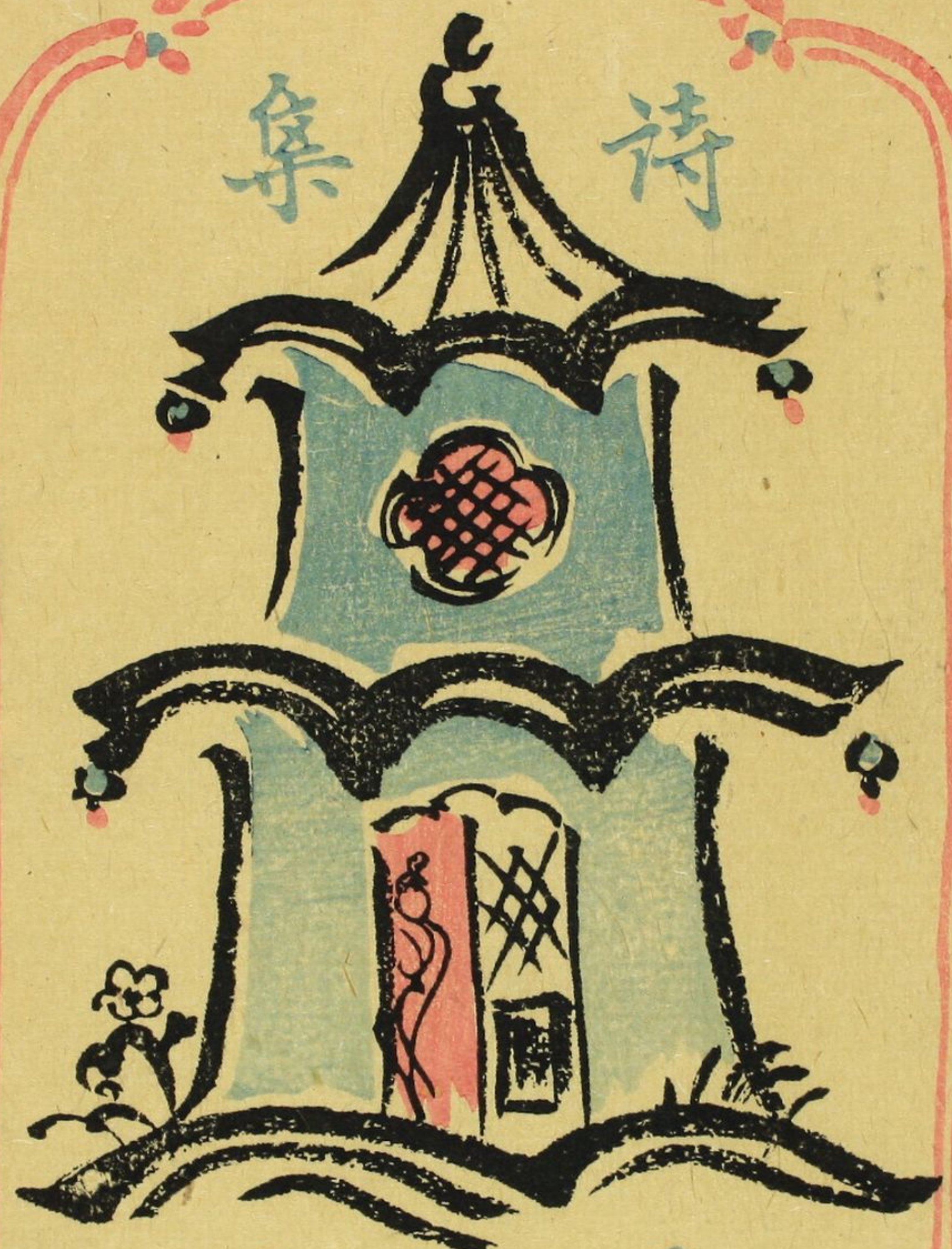
見在れざる人

中川一政著

記

太平御覽卷之四十四

詩集



見てかた



詩集

見ふれざる人

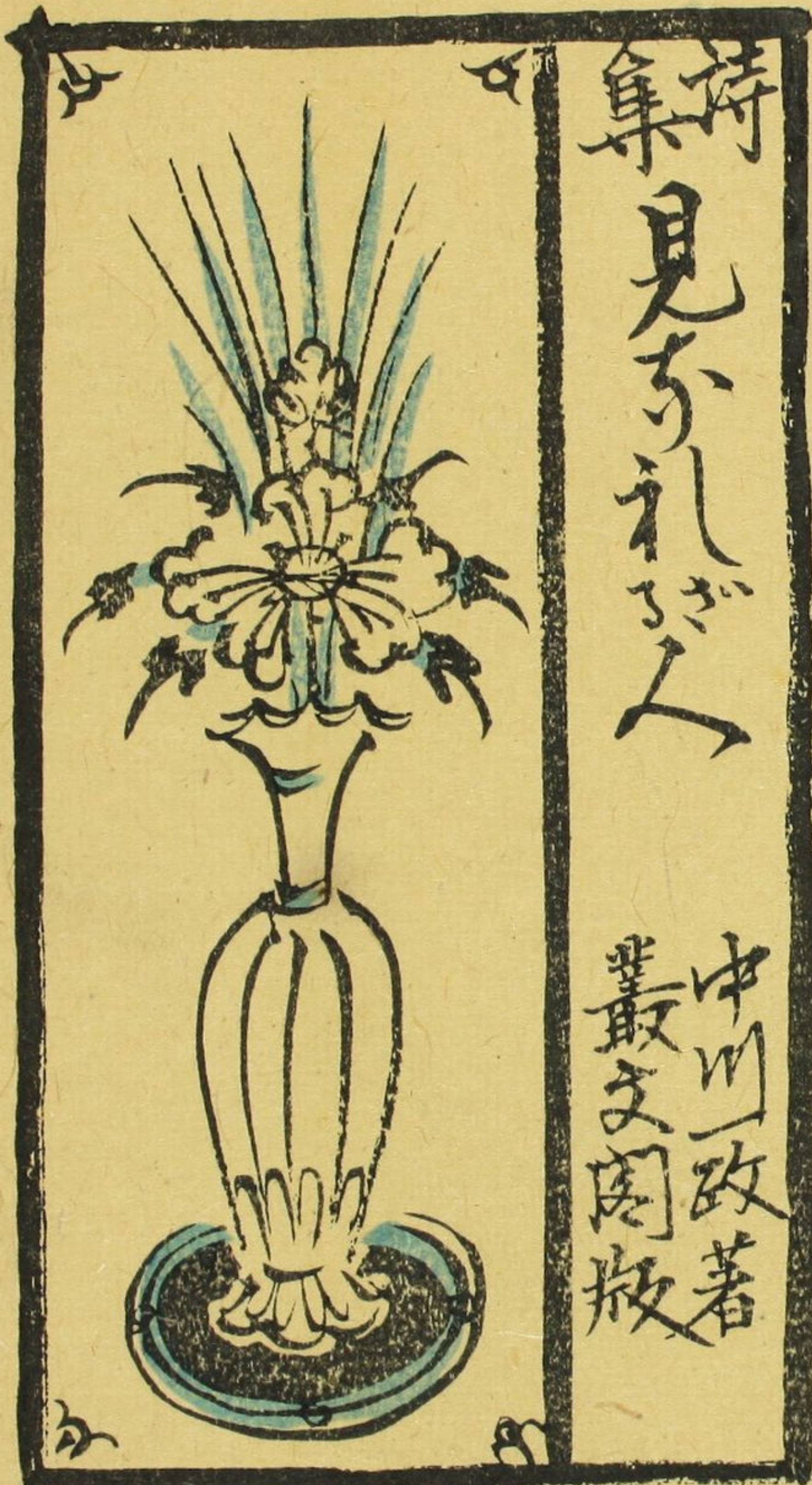


中川一政著









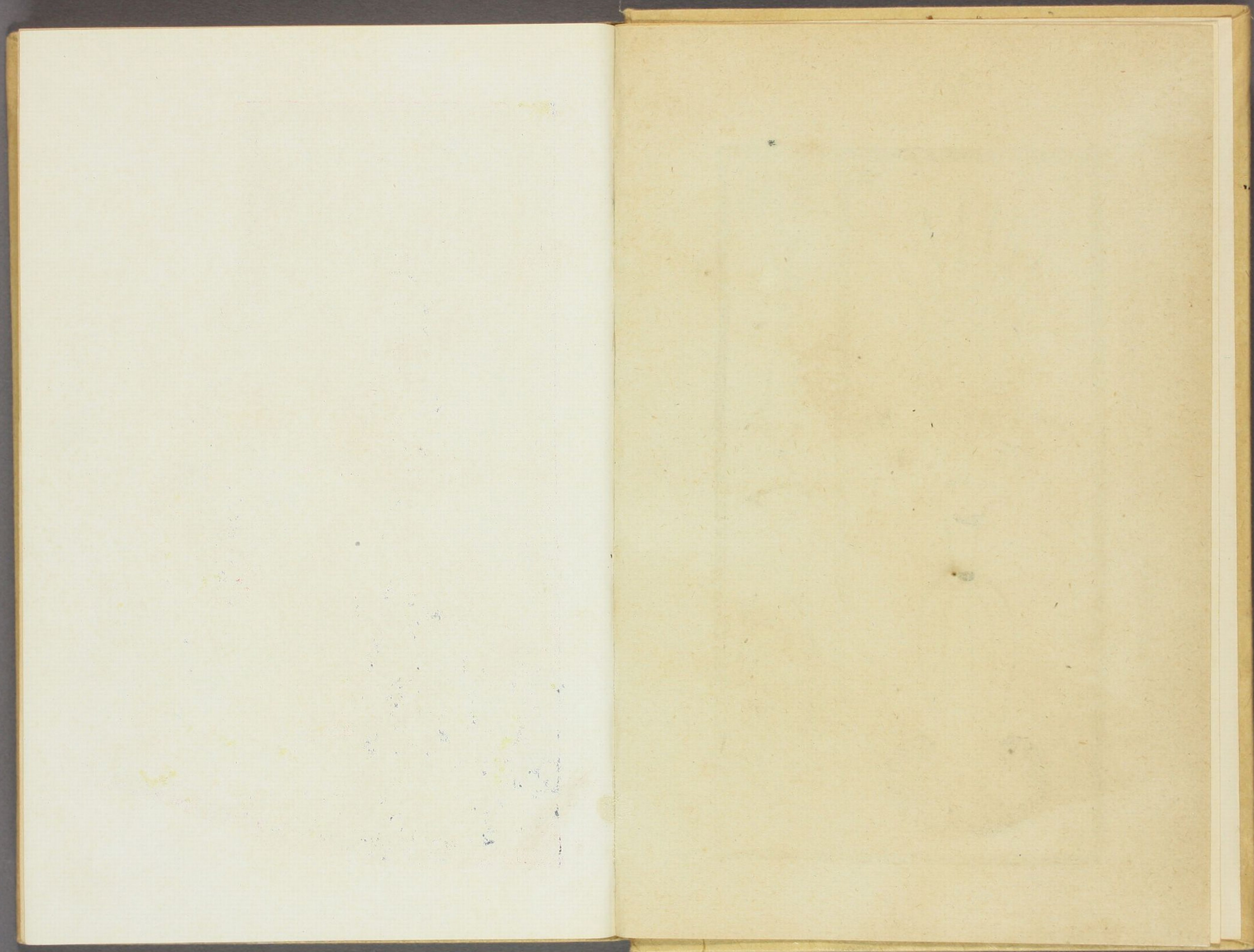
詩集見礼人

中川一政著
叢文閣版



様

中川一政





此書は世に出してよいものであらうか。又わるいものであらうか。自分にはよいやうにも思へたし、わるいやうにも思へた。

自分は自分の胸に迫つて來る感じを筆に傳へた。若しくは傳へようとした。原稿を整理しながら、傳へたと云へる作品は世に出してよいと思つた。傳へようとした程度で終つてゐる作品を見た時は淋しかった。

さもあらばあれ。現象が現象であるうちは消極のものである。現象のうちには永劫不變のものを見るものこそ詩人である。

自分がかゝる詩人に遠いものである。然し自分も亦永劫不變のものを見究めたいと思つてゐる。

千九百二十年十一月

一 政 識 す



此書は世に出してよいものであらうか。又わるいものであらうか。自分にはよいやうにも思へたし、わるいやうにも思へた。

自分は自分の胸に迫つて來る感じを筆に傳へた。若しくは傳へようとした。原稿を整理しながら、傳へたと云へる作品は世に出してよいと思つた。傳へようとした程度で終つてゐる作品を見た時は淋しかった。

さもあらばあれ。現象が現象であるうちは消極のものである。現象のうちに永劫不變のものを見るものこそ詩人である。

自分がかゝる詩人に遠いものである。然し自分も亦永劫不變のものを見究めたいと思つてゐる。

千九百二十年十一月

一 政 識 す

詩集目次

春光……………一
幼兒……………二
家郷の弟妹に……………三
犬の晚餐……………七
くもり日……………九
葉笛……………一一
三郎といふびつこの犬と僕……………一二
煙草……………一四

野の娘……………一六

遠き弟に……………二一〇

まづしき母子……………二一五

父の出發……………二二七

家をまもる兄の歌……………三二一

となりに住める貧しき友……………三三五

所信……………三三六

病める妹……………三三八

見る事……………四一

わが母……………四七

自愛せよ……………四九

毛布……………五五

ある夜……………五七

ひるすぎ……………五九

守る時……………六一

貧しき母……………六二

もでる……………六五

ゴオホ兄弟……………六八

友達……………七〇

宣教師の話……………七四

ぼくのうち……………七六

父……………七八

守備兵……………八三

四

希望……………九〇

みなれざる人……………九二

雲雀が岡附近……………九六

われは鳥に告げる……………一〇〇

聖フランシスの家族……………一〇二

静物……………一〇七

岡の話……………一〇九

母……………一一一

嫁ぎゆく彼女に與ふ……………一一四

自分と世間……………一一八

偉大なる人……………一二〇

以上四十二稿収録

挿繪目次

少妹肖像斷片(原色版)…………… 卷頭
杉と茶畑の風景(寫眞版)…………… 一
少女(寫眞版)…………… 一七
暮春の景色(原色版)…………… 三三
草枯れし監獄の横(寫眞版)…………… 六五
靜物(寫眞版)…………… 九七

詩集

見なれざる人

装

畫

清宮

彬氏

挿繪製版

田中松太郎氏

彫刀

伊上凡骨氏





春光

空に逝く雲 ゆるゝと見てしは
いとなつかしき地震なみなり

王宮をいでたる王子

ほのかに歌をこそ思へ

ひるのひかりみちみち

逝く雲のいろをうつして

そのあたり草花さけり

王宮をいでたる王子

ふと春はかなしくなれり(一九一三作)

幼児

かへりみればわが來し岡のうへに
わが日ごろ愛する幼児ゐてわれを呼べるなり
こゑは夕かせにまぎれてきたらねど
そのあかき唇うごくがみゆ

なにごさを云へるかわれ知らねど
幼児はみづからにきこゆるもの
人にも解しうるとかたく信ずるが如く
なほもとほき夕風のなかよりわれに語るなり

家郷の弟妹に

いもうともむすめになりつらむ
そのおもかげの眼にうつるぞや

また末のいもうとよ
手習は上手になれ
けふぼくにくれし手紙は
なかなかよく出來たり

上木さんのうちでも

岩井さんのうちでも

かはゆきあかんぼがうまれしとか

ときどきは背負うて

子守唄をきかせてやれよ

また愛弟よ

試験の準備はなりたるや

出發すべき日も迫りたり

はなれ居ては送ることもならねど

ただかげながらいのるぞよ

われは君の才能を信ず

たこへ麥の穂をくらひ

大地にへたばりつくとも

なんぢが兄はなんぢに

力をいたすべし

父上は老いたり

母上は健康ならず

たゞたゞわれら兄弟

力をあはせて

努力精進

つねにつねになまけてゐてはならず

暑くならば毛布をおくる

かたきものをくらひて
からだを害ねな

さらばこの度は見送らず
たゞはるかに目を閉ぢて祈る

ごきごきは何事をもつらねておこせ

ぼくは待つ

折から暑し

父上母上に

よろしく傳へ申せ（一九一四・六）

犬の晚餐

粗食に慣れよ

わが犬よ

けふはまづきものをよくくひたり

けふは母、床にふせり

われひとりなにをも煮ざりければ

なにも汝にあたふべきものなし

けふはいづこをあそびきたりし

いつも元氣で腹をすかせてかへり來よ

けふはなにもなければ

あすはまた何かあるべし

粗食に慣れよ

そしてよく運動

よくたべてくれれば

あたふるものもうれしきぞかし（一九一四・六）

曇り日

犬はひとりであそんでゐる

ひよこひよこ岡へあがり

ひよこひよこ岡をくだる

岡の上には道があつて

海へゆく人がごほり

はなしごゑは

くもり日の松原にひやく

犬はひとりで遊び

その人々をながめに

ひよこひよこ岡へあがり
ひよこひよこ岡をくだる（一九一四作）

葉笛

草原にうちならす
人の子の葉笛
見おろしてなみだくだる
くらきゆふべ
ときはぎはむらがり
ゆく春のなやみあり
木のかげの人の子よ
たゞ葉笛のみひびきたる（一九一四作）

三郎といふびつこの犬とぼく

三

齋田の家へゆけば

三郎がでてくる

一年芦屋で暮らしたぼくを

わすれないで

三郎よ

よくふごりたりな

たまたまに逢ふよろこびは

尾がちぎれるぞよ

けふはぼく 寫生にゆかんとて

こゝのうちにきたれり

ともに寫生にゆかずや

あとにゆけさきにゆけ

日はうらうらごかゝやき

地には三郎のかげ

三郎のりようまちは癒つて（一九二四作）

煙草

二四

三郎よ

まあ休め

ぼくも三脚をおろして

このすすしい木の蔭にやすむ

かさかさこ

ぼくのたもごなるので

首をかしげて待つてゐる

三郎よ ゆるしてくれ

これは

けむいけむいたばこ(一九一四作)

一五

野の娘

愛子よ

おまへはまつくろけ

けれどぼくの愛するおさないいもうと

けふはクリスマス

おまへをつれて来いよ

文子さんは云つたけれど

ぼくはまつくろなおまへが

かたくなつて

自分のまづしい服装を



野の娘

愛子よ

おまへはまつくろけ

けれどぼくの愛するおさないもうち

けふはクリスマス

おまへをつれて来いよ

文子さんは云つたけれど

ぼくはまつくろなおまへが

かたくなつて

自分のまづしい服装を



よろこぶおまへを

白い足袋からまつくろなふくらはぎが
でてゐるおまへを

あの上品なをささない人達の眼に
軽蔑されるのをかなしむ

けふクリスマスと云つたぼくをゆるせ
おまへは野の花だ

くろい口の大きい叫びごゑのあらい
野のむすめだ

たのしさをゑがいてさびしかつたら
かけまはつて慰めよ

けふのクリスマス

おまへをはづかしめられたくないので
ぼくはつれてゆかないのだ
つれてゆくこと云はないのに
もうおほ兄さんとゆくと
となりによ言してとんであるく
おまへをみると
ぼくはいろのくろいおまへが
うらめしい
ゆるしてくれ
わが愛惜しむ
くろいもうごよ
クリスマスでも

仲屋やそばの子とおまへは遊ぶのだよ

遠き弟に

われはなれをおもふ
われはなれの兄なれ
なんぢさびしき日われをおもへ
われもさびしき日なれをおもふ
夕雲空にながるゝ見れば
なれもながめてありなんぞおもひ
逢ひたさの心にむせぶなり
なれもまなべかし

たゞひとすぢになすべきをなせよかし
おこたるはよからず
ただひまなき時をもてよかし
病はおこたる身に入り
かなしみはひまある心に入る
あした日ををろがみて起きいづこ
なが書きくれしおとづれのうれしさ
われも日ををろがみて起きいで
やがてけふも描きをはりぬ
ゑがく事を知りたるは
わが限りなき感謝なり

われは無學無能

されば知りぬ神のいつくしみ

たゝるがきゆきて

わがよろこびを人に願たんとす

世にあくせくごさまよふ

檐下の人間

日を見ずして死ぬるマテリアリスト

そのうちになれのみは入るなかれ

わがよろこびはかれらのくるしみ

わがうれひは

かれらのたのしみなるを

われはなれをおもひて

あひがたきさびしさをなぐさめ

わかちがたきよろこびをさびしめど

やがてあはん日をたのみつつ

今日も暮れゆきぬ

なれもまなびをはりし頃

西に日はおちて

くれなるなる雲ながれ

はるかになれが方にゆく

なんちつよかれ

なれをおもふわれは
なれの兄なれ
はるかにわが心を
ゆく風につたへておくる (一九一五・九)

まづしき母子

まる子はきいきがわるいので
お菓子を買ふてやるのだぞよ
お前はいまつかひしばかりゆえ
またあこで買ふてやるぞよ

駄菓子屋のみせさき
母に寄り來し子をささす
母はかせぎにゆくなり

をさな子よ、よくきゝわけよかし

なれは父なきもの

われのみなんちを養はんす

母は涙ぐみつつ

やまひなる幼児を負ひて

道をよぎりつ

あごに立ちてみおくりし子は

またおのが野の友に

まじらんと走りゆきたり。(一九一五・九)

父の出發

父、旅にいづるなり

とほき讃岐へ

行李に刻煙草を入れ

はみがきをつつみて

その仕度をなしをへたり

見送らんかと云へば

見送るにおよばず

金きたらば正儀に送れ

來月の送金はわれ旅にいでたれば
おそくなるやも知れず
足らざりしならば
云ひきたれと告げやれよ
母かしらいためる故
あすは一日しづかにいねさせよ
家をあまりあくるな
家の用心をせよ
さらばゆきくるぞと
門までおくりし
妹ふたりと母とわれに
わかれをつげて

あはれ父はゆくよ
外套一枚にて
寒くはなきかと
われ心がかりにて云へば
さむくなし
この絹ばりを借りてゆくぞと
わが傘を手にもてゆけり
月となる夜のみち
おくれじといそぐ父は
こよひ鐘のねにおくられて
旅にいづるなり

われら四人にて

野の家は恙なくあらん

父上よつつがなくあらせたまへ

さぬきへ

みちは山河をこえてごほし（一九一五・四・二四）

家を守る兄の歌

母は暮るる春にあひて

かしらいたむなり

いもうとはひるのつかれにて

いぬるなり

次のいもうとは手紙をならふ筆をおきて

ねむるなり

われは DÜRER の模寫の筆を

なげおきたり

父、旅にいでたる夜

わが室にわが晝と
火なき火鉢とつめたくなりて
みなうつうつとす

そこの月光に觸れて

鐘はいんいんと鳴り

しばしかしらのいたみをわするる

母の息は

しづかにあれ

つかれてねむるいとけなきものに

休息あれ

われはしづかに



わが室にわが晝と
火なき火鉢とつめたくなりて
みなうつうつとす

そどもの月光に觸れて

鐘はいんいんと鳴り

しばしかしらのいたみをわするる

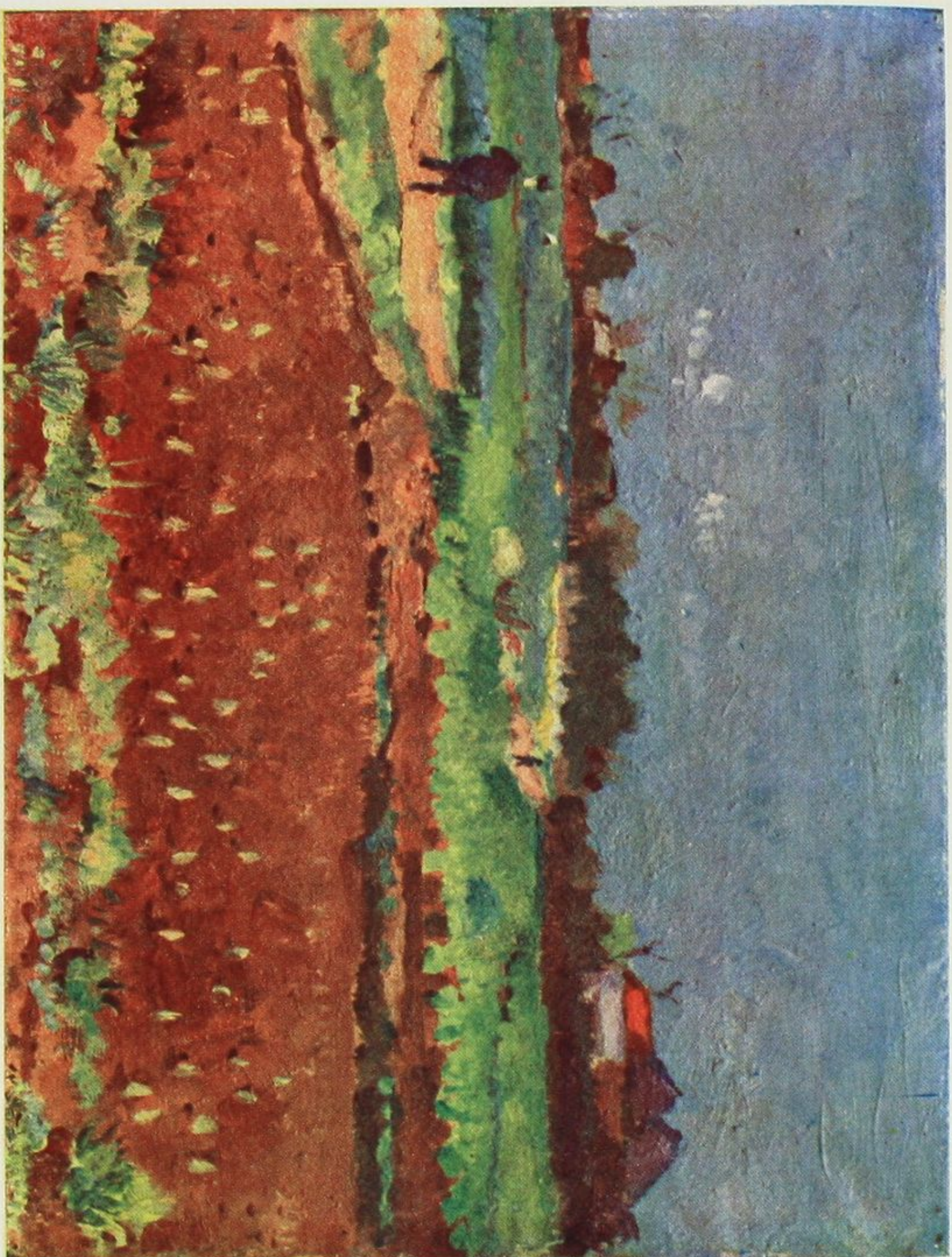
母の息は

しづかにあれ

つかれてねむるいとけなきものに

休息いこひあれ

われはしづかに



窓をひらきて

月光のきえゆくかなたに

鐘のねをみんとす

麥のはたけはしづかに沈みをはり

野末より汽笛のおときこゆ

見おくりて二時間なり

父上はいづくをかゆく

またおごうとよ

異郷にねむりしか

しづかなる暮春

暮れて夜となりぬ

わかれゆくもの
 にごまるもの
 いぬるもの
 病めるものに
 おのづからなる平和よくだれ(一九一五・四・二四)

こなりに住んでゐる貧しき友に

友よ、なんぢに糧ありや
 なんぢの健康は如何ぞや
 なんぢ病む勿れ
 なんぢの妻病む勿れ
 高くつよくのぼりゆけ
 墮つる勿れ
 慣るる勿れ
 つねに朝あしたの日ををろがみ
 つねに眼ざめし如くあれ。

所信

三六

父母はあはれ
老いゆくなり
憂慮と焦心と

余が身の上にかけて

されど神よ

逢はしめよ

われら死したる後の世に

われかがやかに

父母のみまへに

俯仰愧ぢざるわれは子なりと。(一九一五・一二)

三七

病める妹

三八

われはいごをしむわがいもうとよ
除夜の鐘は鳴りてゆくぞや
なれは病める床のうちより
をこめ十八の年にわかるるなり
なれ癒え
なれたて
なれあゆめよ
なれは人に逢はせじ
なれはわがいごをしむ妹なれ

人にさげすまるるをわが惜しむ妹なれ
われはなれを見せず
われひとりいごをしむ
なれはたのしきあそびを知らず
まづしきころもにてひとりゐる
なれはこころ義しく
はづかしからず神のみまへに
なれをこのまざる者
なれをこのますと云へり
されごさみしさを慰めよ
あまゆるにまことの母なかりしもの
いかでかたのし笑顔あらんや

三九

なれはわれのいもうとなれば

ながいかなる日も

われをたよりとせよ

病みたるなれのうらがなしさ

なれ癒え

なれ立て

なれあゆめよ

除夜の鐘はなりて

たのしかるべき

春はくるものを。(一九一五・二・三二)

見る事

描けるだらうかと思ふ時、決して描けるものではない。見えないから危ぶむ心が来る。研究所や学校にゐる人(またはそこで習つた人)はかういふ時にも平気で描く。見えるといふことに無關心であるからである。見る事を知らない。そして見えると思つてゐる。

彼等の藝術は平行、若しくは反撥の藝術である。技巧が出来たのちに彼等は描く。しかし見るから技巧が生じたのではなくては真ではない。草はかういふ風にかくべきものと思へばそれは平行に終る。草をかういふ風に描いて見ようとおもふ時、それは反撥する。草となつて草を描く時、草が見えた時、畫家は自然

と溶合する。

一度でも見たものはその境地を忘れない。その境地以外に身を献げることの出来ないもの、死に身になれないものこそ藝術家であると云つてよい。人はそれによつて生きるのである。完全になるのである。

五十年生きてゐても、見ることを知らないならば、生きながら死んでゐるのである。

見る時にばかり呼吸が出来る。生長といふことも見ることを措いて考へられない。

見ることの出来るものは、たゞ肉眼に見えるものを描く淋しさにたへない。子

供と相撲をこるやうな淋しさにたへない。見ることを措いて、描くことをやめて我らがたよるべきものはない。萬世永劫變らざるものに觸るることは出来ない。それによつて我らは荒寥につゝまれたこの世界より天國をみるのである。人々の求むる天國を一分も疑はず見るのである。一本の草にも。

○私にはこの風景が描けるでせうか。

○描けない。

○いつ迄たつても描けないでせうか。

○それはわからない。描けるかしらとお前が思はなくなつたらかける。お前がをどりあがつてカンバスをたてかけ、そして筆をこるのももごかしい時が來たら描ける。見えないから描けない。見える時をのがしてはいけない。見えるものばかりお描き。心細いだらうけれどそれより以外にお前の力の育つ道

はない。

○私には見えませんでした。そして半分ばかり出来ました。そしたら見えなくなりま
した。

○お前はもう落ちたのか。精力のない奴だ。

○私はまた平凡な人間になりました。私は明日またいま描いたやうに描けるか
と心配です。これは私が一人で描いた気がしません。誰か見えざるものが私
と一所にゐた気がします。見えざるものが明日来てくれなくては私は描けま
せん。私はこの繪の一筆觸も尊い気がします。私は大切に持つてかへりま
す。

気分を出さうとして気分が出たのではない。気分を出さうとして描くならば怠

屈する時が来る。自然と溶合してゐたから、気分が出たのだ。完全に溶合が出
来れば出来るほど、気分がはつきりする。

見える境地は自由自在である。光りゆくものの如く、延びゆくものの如く。樂
しいとおもつて畫をかく人は平行する。表面ばかり撫でてゐなければならな
い。苦しんでかく時は反撥する。無理な力であるからである。

見える境地にゐるとき、拙ない一筆觸、一色彩の間にも神の恩寵がひそむ。力
と光はそこから發する。

顔料と畫布が見えてゐる時ははまだ溶合の境地ではない。

鍋蓋で防がうと前から用心してゐたら、敵の太刀はふせげない。鍋蓋に眼がく
らむからである。くらむ心は隙である。畫をかく事にもこの事は云へる。

藝術家は感情から、學者は智識から、宗教家は意志から。おのおの入りゆく所
のものはちがふ。けれども眞の人間は（見る事の出来る人間は）一人で三者を
具備し、そして高き調べをなしてゐる。入口にまごついて一生を終るのは今の
藝術家、宗教家、學者である。（五年一月二十二日）

わが母

母を賞められるのは嬉しい。母をけなされるのは淋しい。母は自分達の爲にき
たない風姿をしてゐる。余が母をけなす者は余の友人でない享樂主義者だ。余
が母は余を生んだ母ではない。けれども余を育ててくれた母である。
母が余を愛し余を信じきつてゐる事は人には量られない位である。母はぢぢむ
さい。けれども一分も曲つた事はしない。母が十錢の錢を得るには余等が金を
得る勞力の何倍の勤勉をするかわからない。母は休むことを知らない。母は自
分が繪をかきに出るのを見ると機嫌がよい。余が畫が展覽會に出ると母は雀躍
して知る人逢ふ人毎に話す。金を儲けないのでらくらしてゐる自分を近所では
悪く云つてゐる。しかし母は余を愛し信じてゐる。そして疑つた事はない。余

は母をいまに樂をさせてやりたくおもつてゐる。そして母が生んだ妹をよく世話して母を喜ばせてやりたいとおもつてゐる。そして『お前の母は何の爲にあくせく世に生れてきたのか』と人が云ふとき『余を立派に育てあげた、その爲に余が母は生れてきた』と云へるやうな立派な人間になりたくおもつてゐる。

自愛せよ

自愛せよ、汝を。

汝を高きへのぼりゆかすは汝の足である。

汝に淨きものを握らすは汝の手である。

そして他の何者もかくせはしない。

肉體の慾望に眼がくらむ時（自分の制作慾が衰へた時）そしてそれに駛らんとする時、それは自分の天職を輕んじようとする。

この世の荒涼をよく知るものは唯一の力とするもの（自分には藝術）に身をゆ

だね、捧げえぬ荒涼にたえぬ。
身をもゆだね捧げんとする心情に燃え乍ら到達出来ぬ反動は云ふべからざる絶望である。

この時が恐ろしい。肉體の慾がこの暗黒な自暴自棄にもひこしい隙に乗ずる。

普通の人間にとつては肉體の慾は墮力となる。

墮力は人間の光と力を消滅する。

墮力は人間を老いしめ、不淨にせしむる。

墮力は人間の血を濁らす。

自分は肉體の慾に引づられゆく人間ではないよし一時引づられることがあつてもまた戀しき神のふところに歸りゆく。

自分の慕ふものは快樂ではなく歡喜である。墮力ではなく力である。反撥ではなく溶合である。

わがいのちなる神。わが全身をもて奉仕へうる。わが全身全靈もて献捧せんとするわがいのちの神。

肉體の慾はわが全身全靈をも献捧するに足りぬ。

自然は男性の溺れんとする時肉體の慾の羞恥を興へた。それによつて淨くならせん爲、眞の男性となさん爲。

肉體の慾は男性にとつてあきるものである。女性にとりては肉體の慾はあきないものである。

男性は女性の生甲斐のために子を興ふる。

女性はその生み育てたる子に骨と肉とを興ふる。

男性は子に慧き心を興ふる。

女性は人類のため此世の漕手。

男性は人類のため此世の舵手。

故に女性は男性を助けてゐるが如く、而も男性は永遠の行手のために専念するのである。

女性が全身全靈を投じうるものは常に現世である。かたちである。

眞の男性には寧ろ未來である。かたちなきが如く見ゆるものである。

余にこりて情慾の恐ろしきは獨身なるが故である。

不淨は眼にいで、顔にいで、總てにいづる。おのれをあざむくことは出來難い。神を偽り完することは出來難い。

淨き聰明なる人間にならんことは男性の任務であり喜悅である。

間隙のある時は打ちかちがたき情慾。

それからくる不淨の第一歩。

肉體の慾は男性にとつて此世に生くる上の一部分であるけれど、凡俗は眞の男性を見ぬ故この一部分に感溺する。

汝は制作によつてうち捷て。

神は制作の歡喜を知らしめた。

不淨によつておのれを腐らしむるは神の意志に背反する。

余にとつて悲しきは虚榮よりくる不淨。卑怯より來たる不淨。そして情慾より來たる不淨。あきらかに聖人の顔を見上げがたき事。

自分はあるが儘であれ。いまは肉體の慾望をつつしむべき時である。わがいのちなる事業に没頭すべき時である。いかなる境遇にあつても克己といふ事が必要である。それによつて人間が強くなる試み。いやが上にも高められゆく試み。そしていかなる境遇でも人間は立派になれる。境遇を死なしてはならない。

毛布

夜半のねざめ寒ければ

父は毛布を買はんと思へり

おのおのに一枚の白き毛布

父は買はんとおもふなり

幼な兒にも買ひあたへん

また兄にもと思ひつつ

年は幾年をへたり

星しろくまた今年も寒くなりて

父は白き毛布を買はん

おのおの一枚づつの白き毛布を
かひあたへんと思ふなり。

ある夜

ねむりたる愛し子を
起きよと云ひてゆする母は
風呂に入れてやらんとおもふなり。

ねむりつつ湯に入りし愛し子を
あらひつつ湯殿より送りいたし
さて母もあがりければ
秋の夜ながく
母はねむくなりぬ。

この時愛し子は課業をおもひいだしつ
ねむりを忘れし如く
大いなる聲をはりあげて
第五課植物のところを
くりかへし讀みはじめたり。

ひるすぢ

客あらん時をおもひて
母はわれらが日常の茶碗には
かけたるをいだす
我はかけたる茶碗もて
麥飯をくらふ。
母よ今日は何かありや
けふはひるに誰も居らざれば
何もつくらねど
ここに紫蘇の煮たるあれば

それにてすませよ

母は庭にありて答ふ。

書を描き來りて

ひるすぎ

われはかけたる茶碗もて

麥めしをくらふ

秋なれや

日の光うらうら

木のかげはまごころむ

母よ

わが麥めしはとりわけて今日うまし。

守る時

守る時

身をいたはれ

いまは待つ時

攻むる時

力をつくせ

いまは勝つ時

守る時守りえざるもの

また勝ちえざるもの

貧しき母

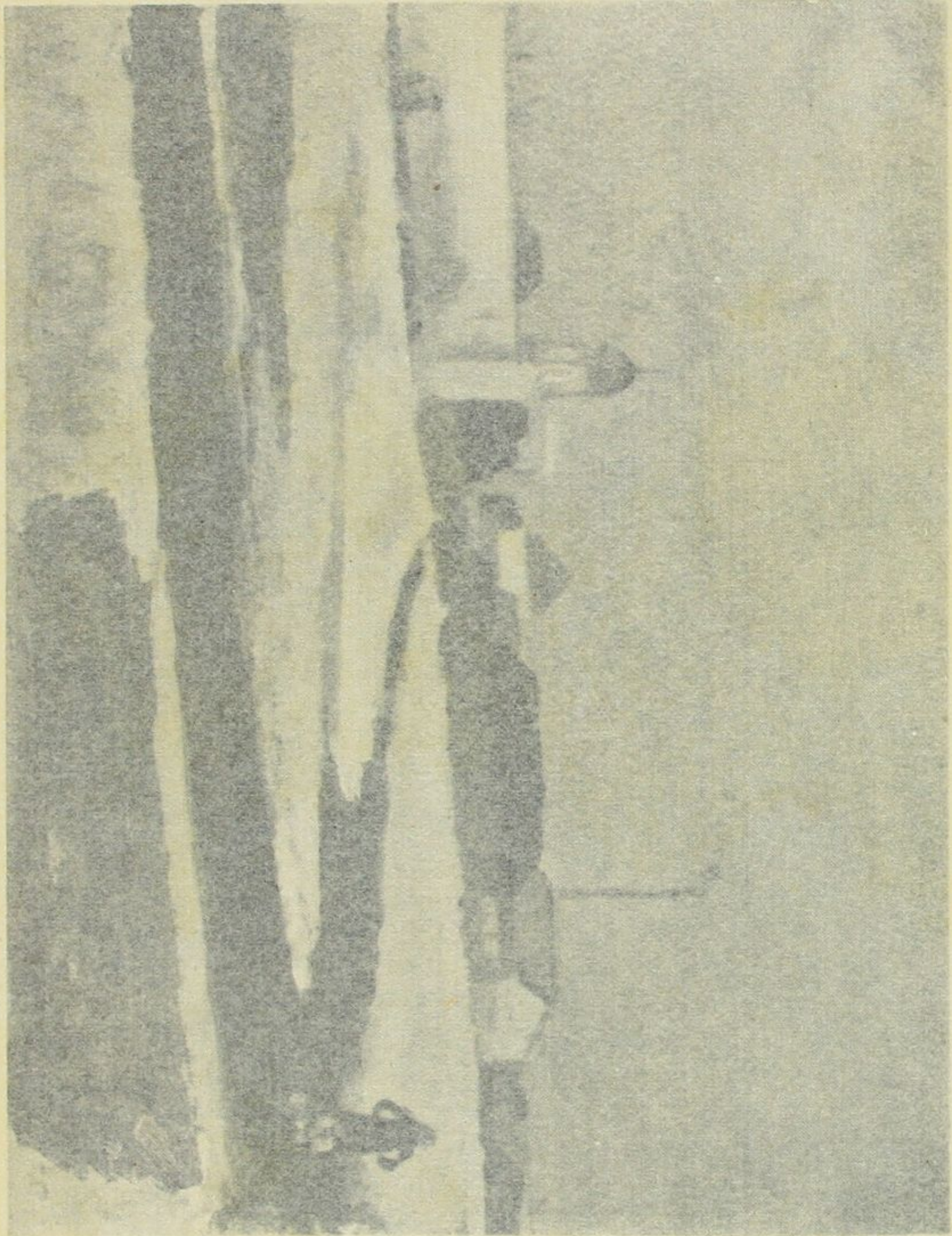
六二

人はなべてかなし
さ夜ふけし夜のみち
米何升を買ひてかへるもの
あにわが母のみならんや
われはけふ
しほ鮭のひときれを
買ひてかへるまづしき人を見たり
顔をざめて

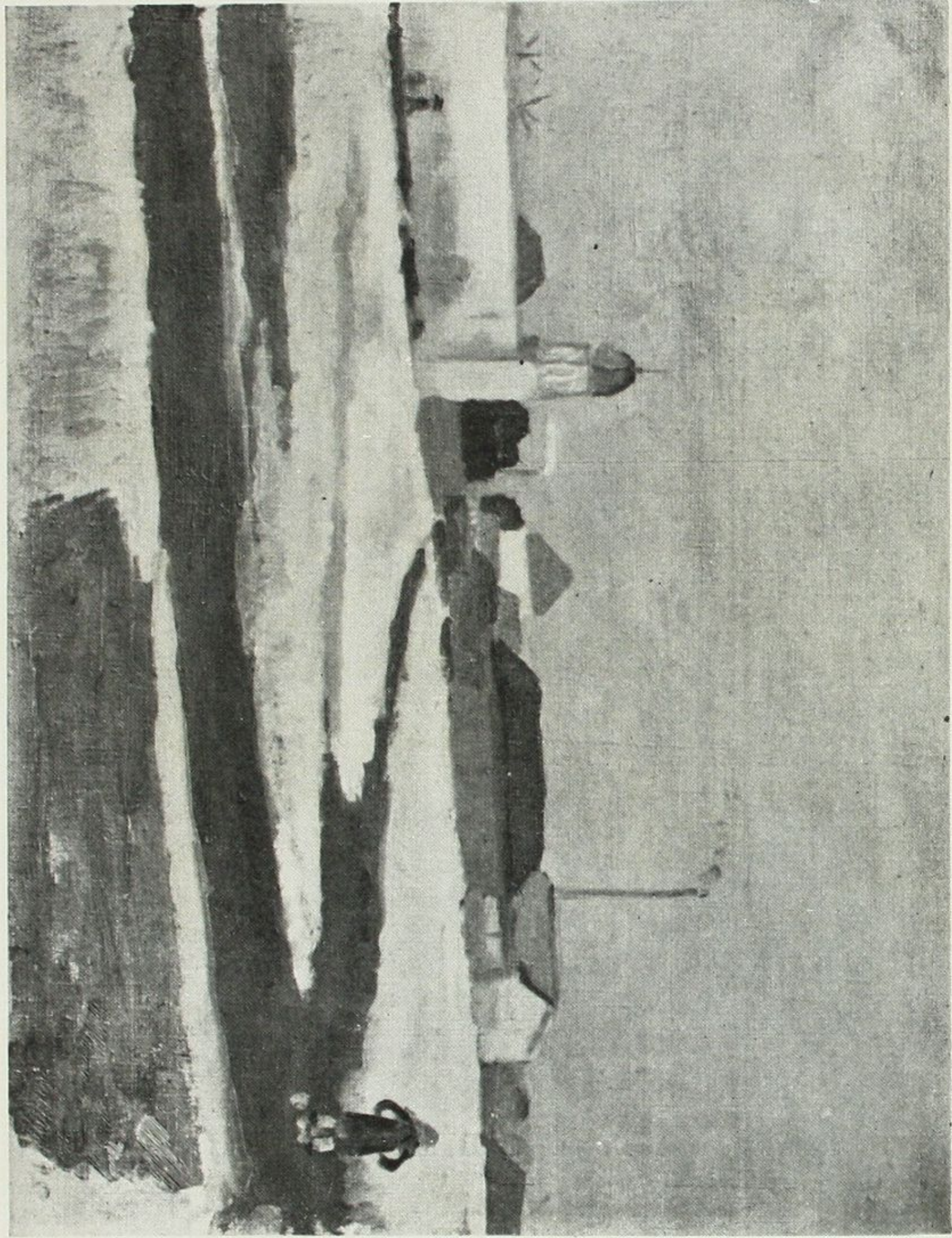
この世にいまは爲すことなきが如けれど
背には子を負へり
何も知らざるをさな兒よ
汝が母の背はあたゝかくして
汝が母がくるゝものはうまさかな

ねむれ、いとし兒
みちたりて
ねむれいとし兒
なが幼兒なる日
母は世にも貧しきくらしをなしつゝ、
なをそだてあぐるなり

六三



すべて人は勞苦す
すべてのものはみなかなし
されど子をまもる母はありて
をのれひときれの鹽鮭を
紙につゝみて買へども
なほ世のどん底に
死なせずしてとらふる力あり
なほ世のためになさしむるなり
いとをしめ汝が兒を
おのがじし
わが兒を負へる



すべて人は勞苦す
すべてのものはみなかなし
されど子をまもる母はありて
をのれひときれの鹽鮭を
紙につゝみて買へども
なほ世のどん底に
死なせずしてこらふる方あり
なほ世のためになさしむるなり
いこそしめ汝が兒を
おのがじし
わが兒を負へる

ちまたの母は涙ぐまじきかな。(五年十月)

もでる

六六

もでるとなりし妹
ねむければとて
ねむらせたり
さて友もかへりし故
おきいでよこいひて
われはちいさき妹を起しぬ
あたゝかくなりて
ねむりしもの
うつうつともでる臺にのる

われゑがかんとして
ゑがきえねば
怒りて叱りぬ

わが仕淨夕べになりぬ
いであすにせんご筆をおけば
わがちいさきいもうごは
椽にはしりゆきてかへりきたらず
何をせるかと見にゆけば
雨のしぶきかゝるところに
わが顔をみて
手枕をはづし

六七

ねむげなるかほに
 あはれみを乞ふ心あり
 ゆるかせし
 いとちいさなるもの
 われはなれをくるしめて
 なほもいましを叱らんや
 いでや家路にかへれ
 母がふどころにかへれ
 けなげなるいとうつくしきもの。(一九一六・八・二〇)

ゴオホ兄弟

ああ自分をなげいだすは
 英雄の態度なり
 テオドール、ゴオホ
 ああ自分をなげうちて惜しまざるは
 人間の極致なり
 テオドール
 ヴインツェント
 ああゴオホ一家のうるはしさ
 ゴオホ一家の精神のうるはしさ

ヴァインツェントの足となり

テオドールと力となし

ともにさながら人類の意志となりぬ

われを放擲して

死にて光る二つのたましひ

ああ荒涼の世に

光かゝやかせ

てりわたらせ

ヴァンゴオホの愛

テオドールの愛を。(二九一六・七・四)

友達

自分がかれの信ずる友である。かれはまた自分を信じてくれる友である。かれが自分をはげましてくれ助けってくれ慰めてくれたことを思ふとき自分はいつも有難く思ふのである。

自分がかれを愛するのは何故であるかはしらない。たゞ自分の心がかれに結ばれたのを感じる。さうしてかれは自分の友であると思ふ。

人を批判するとき人はその人を愛してゐない。その人の愛は足りない。知識的の理解は愛ではない。自分がかれの缺點を見ることはあつても、自分のかれに對する愛はかはらない。

人がかれのことをつまらない人間であるといふときにも自分がかれを愛する

心はかはらない。かれをつまらない奴だこつまらない人間が云ふとき自分は怒りを感じる。また尊敬する人に云はれるときがあつても、自分は自分及び友のいたらないことを淋しくおもふばかりであらう。

自分は輕蔑するやうな友を持つてゐない。自分の友達の惡口を云ふ者は自分の淺慮を曝露するばかりだ、なせそんな友達を持つてゐるかときかれた時、その人は恥ぢなければならぬ。

ああかれをののしるをやめよ

かれはわが友なり

わがいをしむ友なり

かれはいたらぬ者

われもまたいたらぬ者

かれをののしるものよ

われをののしれよ

かれを殺さんとするものよ

またわれを殺せよ

かれはわが友にして

われを鞭撻し

わが力となり

われを教へたり

ああ、かれをののしるものよ

その前に立ちて

われは云はんとす

われはかれの友にして

かれはわれの友なりき

昔日の友誼

おもひいでて落涙をおぼゆ

よしみはながかれ

かれはわが愛する友なれ

かれをののしるものよ

われをののしり殺し

しかるのちかれをくるしめよ。(五・六・一三)

宣教師の話

もう七年も前の事であつた、旅した途中で佛國の牧師に逢つた、かれは自分
にきいた。

○神様は幾人もゐると思ひますか

○ゐます、めいめいの心のうちに持つてゐます

○それでは眞理は幾つもあるのですか

○あります

○それではこの畑の菜の色を青いと云はずに赤いといふ人があればどうす
か

○赤いと思へるなら赤いと云つてかまひません

牧師はお前はあまり剛情だと云ふやうな顔をして自分を見下して大股にある
いてゐた。そして岐れ道へきた時かへりに教會へよつて下さいと云つてくれて
西と東に別れた。歸途自分は計畫が違つて他の山へ下りたのでその教會へよれ
なかつた。しかし一年たつて神様も眞理も一つであることを信じた。自分はその
牧師にすまないと思ふ。今なら立派に答へる事が出来る氣がする。(その當時も
立派に答へたと思つてゐた)當時の自分は(當時の自分としては)堅く信じてゐ
た。しかしその信念は今信ずるにしてはあまりに淋しい。凡俗の世界にとつて
は眞理はいくつもある。しかし凡俗が育つ時があれば眞理は育つ。そしてここ
からみても動かせない眞理になり、そしてそれが本當の幸福を人々に與へる。

ぼくのうち

ぼくがひとりであるこのうちへ
戸を叩いてゐるものはだれた
わたしと云つてゐるものはだれた
花をもつてゐるものはだれた
あたしならおはいりさあおはいり
ぼくのちいさいもうとさん
學校のかへりに
雜司ヶ谷のすゝかけの並木を
白楊のかげの青草を

ふみつつたづねてくるぼくのうち
あたしならどうぞおはいり。(一九一六・七・四)

七八

父

自分の父は無學な一平民である。しかし決して頑迷な人間ではない。自然を踏みつぶす人間ではない。現世的快樂は微塵も持つてゐない敬愛すべき人の父である。父は子の爲にすべてを盡し、自分の力に堪へない重荷をもなほ甘受してゐる人間である。父は自分達の仕事を自分達の幸福としてゐる。父に於ては自分達は第二の父である。不幸にしてなしえなかつたかれの生涯は自分達に於いて創められると信じてゐる。弟が病になつた時、あれ程物に動じない寛大沈着な父が、郷里の家につくやいなやノートや金を放つたまゝ走つて病院に行つたときいた。自分は後にその事をきゝ父を思つて涙が流れてきた。いつも思ふ。父の財寶は自分達しかない。自分が死んだら父の財寶はなくなる。自分の仕事

七九

が風塵に歸し、父の財寶は朽ちては既にかへらない。父は六十日の間夜二三時間から四時間位しか眠らないで弟を看護した。眠る時も弟の手首から綱をひいて自分の手に縛りつけて弟に用のある時ひつばらせた。弟は小便がしたいと云つて出ないのに（出さうで）ひつぱり、淋しいと云つてはひつぱつた。父は目ざめては何を云ふのかと走つて行つた。

郷里の家には自分達の従弟（三人の中の一人）が肺を患つてゐたが伯父はその従弟の傍へゆく事も怖れてゐた。自分はたよりない従弟の父を悲しんだ。しかし自分達の父は傳染を考へることなく病弟と枕を並べて弟のくるしみをわがくるしみの如く惱んだ。弟の病室は北風が壁から吹きこむので父は新聞紙を一面にはりつけたり、竹をわたして氷嚢をつるしたり、夜具を吊つたり、藁の牀をやはらかくしたり、スープを作つたり湯氣で夜明の室をあたくめたりあらゆる事を一人でした。自分が後から到着して行つた時、父は繃帯を乾かして巻いてゐた。そしてそれで環を作つて弟のいたんだ腰へひいてやつた。弟は耳がきこえなかつたし、口もきけなかつた。そして戸を隔てて父とある自分の聲をもきくことが出来ない。自分が頭を出したら弟は大きな眼をあけてゐてまたねむつてしまつた。いつも逢ふ時涙を流すまでによるこぶ弟が自分の來たのを見てゐながら何事もないうやうに眼を閉ぢたのを見て永久の別離を思つて自分は泣いた。

父は病人の痛さがわかつた。云はぬ語らぬ子の痛さがわかつた。子がいたむ時自分が痛んだ。だからあの重病から弟を救つた。弟が病院を出る二三日前になつて父は罨布のきれを丁寧消毒して弟の猿股を縫つてゐるのを見た。父は東京へ歸らなければならなかつた。その間際の一瞬までもいつ立てるかかわりもしない者のために用意してゐたのである。自分は弟のない世を考へる悲しさに堪へなかつた。私が兄さんに代つて死にたいと妹は云つてゐた。それにもま

して父は強い執着を以て弟を護つた。自らを擲うたなければ人は救ふことは出来ぬ。父にして始めて弟が助けられた。自分は悲壯な有難さにうたれる。瀕死の若者を擔ふてゆく老いたこのジャンバルジャンのふかき愛と動かざる自然の意志を感じる。父は一生を子の足臺になつて、而もそのたふべからざる苦痛をよろこびの火に變ずる。自分は父を見る時、心底からの恩愛の情を感じる。自分達の仕事を信じ喜んで父をよろこばせたい。父が喜ぶ時自分のやうなものもよろこんでくれる勿體なきを感じる。

自分は父を苦めた。自分の過去は自分の不肖から父に苦痛をあたへた生涯だ。自分は淺間しい姿をした父の子であつた。頽廢した少年であつた。けれどもわが父よ。自分にあの淺間しい過去がなかつたら今日の私もなかつた。一粒の麥が地におちて死ななければ唯一つである。私にすべての肉體的の欲望のたよりなきが私を迷はせた。暗い前途を見るに堪へないで父を苦しめた。私は一度

死んだ。しかし私はこれから生きてゆく。萬世に生きてゆく緒を見、そして息をふきかへした。

自分は父が折々自分の室に来て、自分の書を見たり、眼鏡をかけては雑誌にのる自分の書いたものを読んでゐるのを知る。自分は父に觸られるのはくすぐつたい。しかし自分が偉くなつた時、父が全く自分にたよりきる時があるのを信じる。自分の仕事藝術は終世わからないかも知れない。しかしわが父よ、あなたの善良は子の信仰がいに動じないものであるかをいつか見る事ができる。私の生涯に於ける幸福の一つは善良にして朴訥な人間がわが恩愛の父である事である。

守備兵

八四

(兵士銃をかつぎながらくる)

門衛 またやつてきたな

兵士 はい

兵 もう少しふんばつたらどうだ

門 どのもだめです

門 どうしてもだめか

兵 はい、がまんができません

門 こゝへはいるのはいゝとおもふか。お前は守備兵ではないか

兵 さう云はれば恥かしい

門 つかれたのか。力がなくなつたのか

兵 敵をまつてゐる力がなくなつて門の中へはいりたい力ができませんでした。今迄この力がひつぱりつこしてゐたのです。しかし今は平均がこれなくなつたのです。倒れさうになつたのです、だから入れてやすませて下さい

門 兵士といふものは外ではたらくものだ。戦場へふみこむ力だけでなければならぬ。うしろのことはおもふものではない。いままで持ちこたへたのだからもう少し行つてゐろ。みんなああやつて祖國のためにはたらいてゐる

兵 しかしあの人達も来る事があるでせう

門 だからお前も来たのか

兵 ……………

八五

門 とうだもう一度戰場へかへれ

兵 いえ、私はもうこの門の中のたのしさに眼がくらんでゐます。とうか入れて下さい。今度だけは内しよで入れて下さい

門 いつも君は今度だけつて云ふぢやないか

(兵士ころげこむ)

(兵士酔つぱらつて出てくる)

門衛 出てきたな

兵士 いま出てきました

門 とうだつた

兵 王様やお妃達は今丁度ダンスをやつてゐらしつた。多勢の高貴な方々は男

女入りみだれて饗宴をやつてゐらしやいました。みんな私をみつけて大變私の顔が美しいといふのでみんな大さはぎをしてくれ、その上大變な御馳走で大もてでした

門 そんならもうとゞめればいゝのに。あの王様は自分の國が亡びるのも知らないやうな雲上人でゐらしやる。いく人の兵士があゝの戰場に出てゐることか。食べ物と云へば一きれのパンと水筒の水きりだ。それでも祖國の爲といふ信念からおもい銃や背囊を擔つたり背負つたり敵の夜襲のために伏せてゐる。もう今夜で一ヶ月にもなる。隣の國の國王が兵を出しておしよせたといふ噂ばかりでもする分長い。今夜は来るだらうか。もう山脈の上には青い星がかがやいてゐる。夜露の上にこの城を守り祖國を護るけなげなる兵士のうへに幸あれ！ かの強者こそはこの國を救ひだす

兵 門衛さんく

門 何だ

兵 私もう出たくなりました

門 (とぼけて) どこへだ

兵 守備隊へです

門 いやお前はもつと王様や妃達をかこんでダンスをやつて来たらごうだ。妃達や高貴な方々に寵愛され、歓迎されたら行つていゝ夢を結んでおいでよ、もう一度

兵 さう云はないで出して下さい。私は淋しいのです

門 どうして淋しい。そんなけつかうなことはまたごないよ

兵 私は一番立派な美しいある高官の思はれ人ご一所になつてダンスをしたのです。そして一生懸命靴をすべらして踊つてゐたら、ふとこの門を這入つてくるごときあなたがかへれかへれと仰つた事を思ひ出したのです。こゝ

へはいつたことが恥かしくなつたのです私は兵士です

門 さうか、そんなら出る。お前は幾度も幾度もこの門を出たりはいつたりする奴だ

(兵士出る)

兵 ありがたうございます。門衛さん

門 しかしお前は銃をもつてゐないがどうしたのだ

兵 えゝ、私は弾丸をみんなつかつてしまつたのです

門 ところで

兵 あのダンスをしたり、おはなしをしたりしたあの宴會の席で。あの席の窓から御殿の庭にあそんでゐる鷹をうつてみたらおもしろからうと王様が仰有るので私は銃をお貸ししました

門 馬鹿な兵士だ。兵士が弾丸をむだになくしていざ戦争といふ時にどうする

のだ

九〇

兵……………

門それでも行く氣か

兵はい（小聲で次第に大聲になる）みんなわが友は敵をふせぐ爲に伏つてゐる、烽火をあげつつ。夜はふけてきた。敵は来るやうな氣配だ。われも兵士として戦ふべきものだ。おくれをこつてはならない。いままでまぢのぞんでゐた敵だ。腕がなつてゐた戦争だ。それ。走れ走れ（走つてゆく）

門みる、あの兵士は銃なしでかけて行つた。あゝ勇ましい兵士のはたらきがはじまる敵はいよいよ近づいたらしい。一齊射撃が始まつた。あの兵士は走つてゆく。銃がないのだ。可愛さうに。たふれるきり能のない兵士なのに。

（五・六・二六）

希望

われはいまは飛びえざれども

いつかは雲の中にすむ

われはいまは飛びえざれども

あの青雲の中をおもふ

雲の中にわが家がある

飛ぶことを得ざる雛鳥は

手をのべ足をのべ

つねに飛ぶことを考へる

空にながるゝ雲のはたで

九一

のべれば雲に入るわれのからだ
悠々とした春の日に
希望は胸にみちてくる

手を伸べ足を伸べ
とべるかしらん
とべるかしらん
いつかは自由な鳥になりて
いつかは雲の中に入る。(一九一七・二)

みなれざる人

わが家にみなれざる人來りて
わがゑをあがなひ
かへらんとしたるとき
いできたる小妹をながめて
けふは何も買ひてきたらず
これにて何なりとも
よきものをあがなへよとて
紙包をくれゆきたり

みなれざる人のうしろをながめて
わが兄よ

かのよきにほひのする

色白き人はたれなるか

われに紙つゝみをくれゆきたり

われは不審なる幼児をながめて

かれはわがゑをあがなひくれし人なり

かれはなれがよく學べよとおもひしなり

われもなれがよきをこめとなることを

おもふなり

われは今幸福をかんず

なれもよき少女となれ

われもまたよき一人となりて

はるかに幸福をもこめて

わがあゆみを運ばんず

わがいとけなきものは

わが顔をながめて

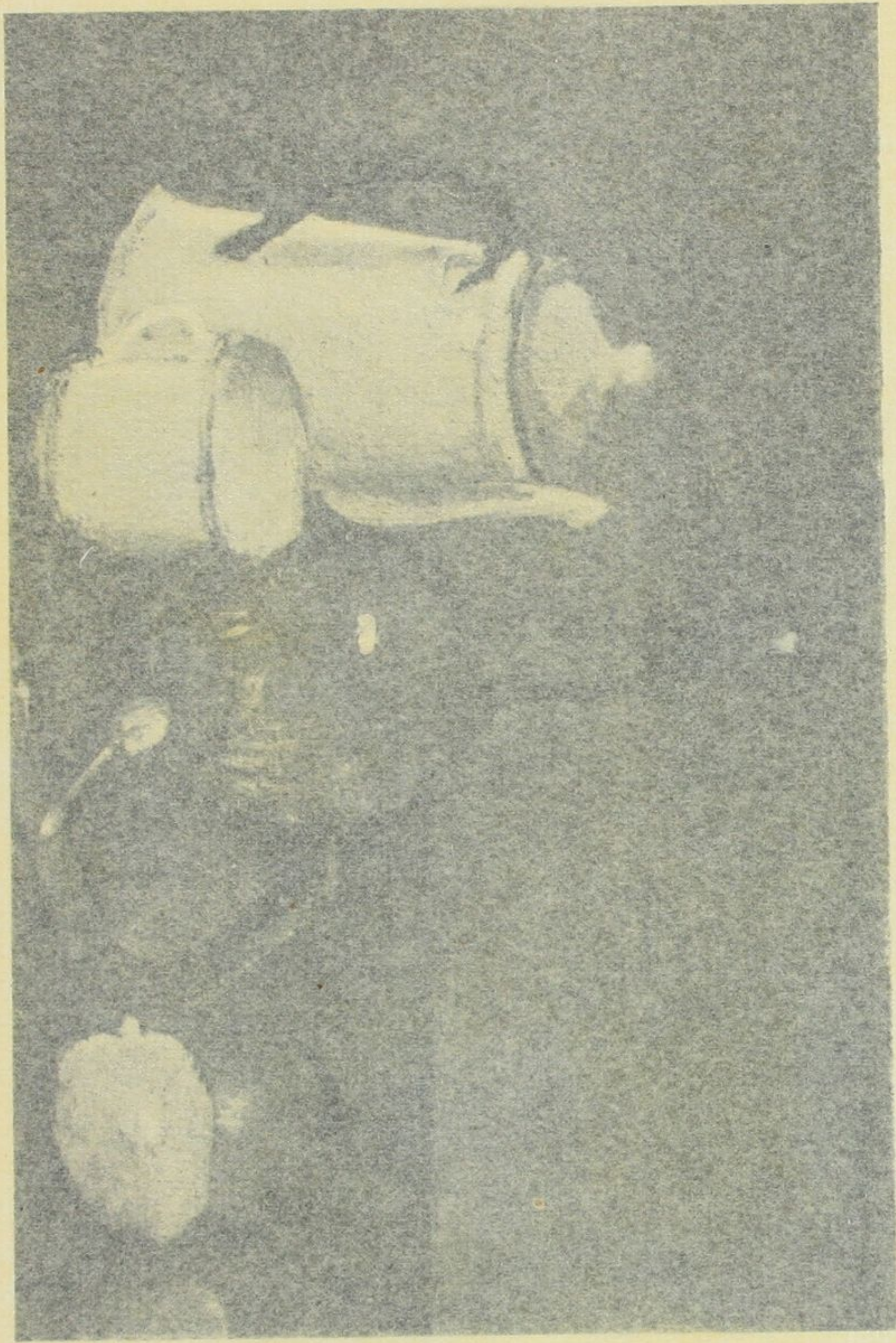
「かの人によき人なり」

げにかの人はよき人なり

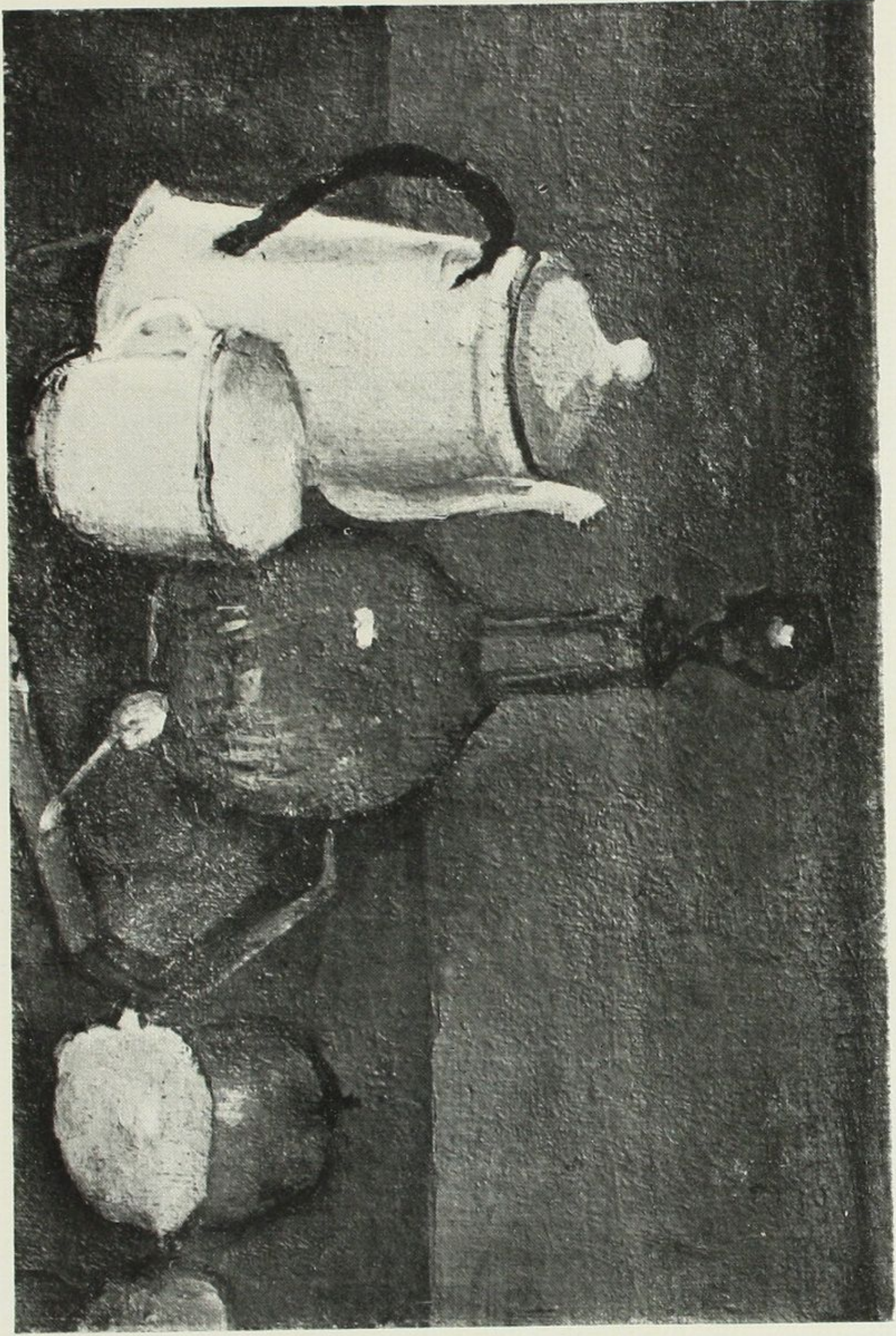
汝、かれをわすれずして

よき乙女となれよ

われは幼児のうなじをなでつつ



かく云ひきかせたりき (一九一七・四・八)



かく云ひきかせたりき (一九一七)

雲雀が岡附近

こゝにいちめん麦が生え

岡となりたる雲雀が岡

こゝより街のけぶりを見はるかす

麥生の道をあゆみきて

板橋へゆく道に立ちて

松の林の中に立ちて

われはみわたす集鴨村

川はながれ

しばしして樹木のしげみにかくれ
旅人はあらはれ
また木々にかくれ
白くつゞく街道の彼方にでる

ああたのしき雲雀が岡
巢よりたちあがれば

うらうらこ空は
青い青い

ひとひらの雲がうかべど
いつのまにか消えてしまふ
われは巢鳴村に住みて

をさなき日より

雲雀と共にある

われも一人こゝにすみ家をつくりて
うらうらこ舞あがり
雲井に高く走る如く
仕事のためになさん

もしかの都會の

こゝにもひろがりてきたらば

雲雀よ

われもまたなれの如く
人なき麥生をさがしもこめて

なつかしき住家とせん。(一九一七・六・九)

100

われは鳥に告げる

われは鳥に告げる
汝は自由であれと。

美しく優しき鶴の鳥よ
汝がわがかたはらにゐる時
命を忘れて
二人は語りあふ。
然し汝はたれのものでもなく
われのものでもない。

101

わが愛らしく
無心なる鳥よ
なつてしまへ
俺のものに
汝は何を考ふる

然し

汝は自由であれ。
おれのものになればいゝのだが。
汝には趨があり
汝は自由である。

聖フランシスの家族

聖フランシスは
人々の家族を見て
矢張自分も楽しき家族を欲しく思へり。
凍れる雪の上に
おもひをまぎらさんとすれど
その空想を如何になすべき。
寂しきフランシスは
雪だるまをつくりて
一つを おのれに擬らへ

一つをその妻とし

一つを子供となし

また娘となして打眺めつつ

そこに居る者共よ

なれは主^{あまじ}フランシスなるか

なれはフランシスの妻なるか

なれはフランシスの娘なるか

幼児なるか

その前に立ちて

大声をあげて云へり。

あゝ可愛ゆきフランシスの家族よ

こゝにフランシスの

かわゆき樂しき家族はあり

フランシスは幸なるかな

この妻を妻とし

この娘らを娘として

いつも樂しくまごゐせり。

されど考ふればまことにフランシスよ

なれは此よき娘を持ち

妻を持ちて

なほ一錢の貯えだになし

汝はいかにして

このたのしき家族に

衣服と食物と

なほ住む處とを興ふるぞ

雪なるフランシスは

鞭にてうたれたれども

答につまりていらへざりけり

あゝはしたなきフランシス

みさげはてたるフランシスが

この心を起したる

答につまりしフランシスよ

木の蔭に結びし汝の家に歸れ

貧乏に歸れ

貧しき衣もて

なほ四時を神ごともにあり

いそしみはげめよ

自問自答の後に

かの秀れたる

アシジの聖フランシスは

かうべを垂れて歸れり。

静物

一〇八

そこにうごめいて
生きてをり

だまつてゐるものは何だ。

ねむれる心をゆり動かし

生あたゝかいいきれを感じさすもの。

あゝ千年も万年もだまつて居り

時として人の心に

重たく生きて来るもの

それは誰がつくつたのか
僕の心をだまらせ
そのごごくうごかすものは。

一〇九

岡の話

110

自分は高い丘の頂べんにゐた。

緑の枝が眼の前に交叉してゐる。

頂べんからまたとなりの丘のてつべんに奥深い細道がついてゐる。

自分は畫の具箱を下へおろして一段上へあがつて下界の様をみてゐた。

すると西洋人の子供がすぐ目の前に現れた。

彼方も驚いた。

しかし草叢の畫具箱をみて了解した

彼は僕を過ぎようとしたが

僕が微笑んだので木の根に腰かけて話した。

僕が住んでゐる巢鴨を知つてゐる事や

巢鴨へゆくにはここから廣い一筋の道があることやをはなしたが

自分がみてゐる景色の方を見て

こんな混みいつた所をかくのはむづかしくはないかと彼は訊いた。

自分は答へた。

『描きたくないものは描けない。』

描きたければむづかしいものは何もない』

彼はわかつたやうだ。

『自分もしたくないことは出来ません』

彼はさよならを云つて

岡の細道づたひにやがて家路へ歸つたが

緑の丘の頂きでむかし語りし畫かきの言葉を後の日におもひ出すや。

111

母

一一三

俺がだまつてゐると

母はやつてくる。

彼方の室は母がひとりぼつちである

こつちの室には俺が一人で黙つてゐる。

母は時々立上つてやつてくる。

入口に手をかけて

俺の心を讀まうとしてゐる

俺はだまつて讀まれてゐる

が、しかし俺には愛情がわいてくる

何しに來たのと微笑み乍らきく。

何しに來たか俺は知つてゐる

二言三言話した後母はかへつてゆくが

俺は人間といふ者を思ふ。

各々支へあつてゐる。

兩方の人の肩と肩へ手をかけあつて立つてゐるやうなものだ。

邪魔におもふ人間をすらすらたよりにしてゐるものだ

『俺が立つて居てはいゝのか知らん』

淋しい人間はさう思ふものだ

俺が立つてゐるので人も立つてゐられるのだといふことも忘れて。

一一三

俺の入口へ手をかけて
俺を見にくる母は

もしやさう思ふのではないかしらん。(一九・九・二五)

嫁ぎゆく彼女に與ふ

今日は汝が嫁ぎゆく日なり

永く我が愛せし

また永くわが慕ひし少女よ

汝はわれと別れて

汝の夫にゆく。

ああわれは汝に告ぐ

われは汝に別れたれども

われは生く。

汝も生きてよく夫の爲になせ

汝がおもふまゝ自由に

たのしく

汝の夫と遊べ。

われはよそながらそれを見れば樂し

今はわが娘なる汝よ

わが生きて此世に仕事をなすを祝福しくれし汝よ

汝をも又祝福す。

わが戀は破れたれども

今は汝と逢ふことも

かなはずといへ

汝をおもひ出す時

われはわが身を捨てし

汝も亦汝自身をつゝしめ

あゝ汝

たのしき汝

かくて一生を過ぐさば

われも汝も

若き日に相知り

共に交りし事も意義あるべし。

われらの逢ひし日は短かかりしよ。

されど思出は深し。

汝が嫁ぎゆく日に

われに呉れし手紙は

ながくわが鞭撻となるべし。

さらば我の愛せし少女

汝が夫とさだめし

わが知らざる男の腕に

身を投ぜよ。

われは知らざれども

汝の夫なれや

幸多き事を祈る。(一九二〇・一一)

自分と世間

自分は世間の人に自分の作品の價値がわからうと思はない。わかつて貰はうと思ふのも止めてゐる。自分の友達や先輩、又は後世の知己(即ちその真心)を自分は頼りにしてゐるが世間は頼らない。世間の人は常識以上の仕事をしてゐない。藝術は常識ではない。肉眼ではなく心眼が要用だ。常識の殻が破れて靈感が現はれなくては藝術品ではない。此作品に感じがあることは靈感があること云ふ事だ。

世間の人々は其常識の尺度を以て藝術をはからうとしてゐる。世間には夫等の人々に率しられる藝術品?もある。藝術家?もある。然し其尺度が吾々に向いてくれば世間の不明である。

本當のものがわかるには其人が何事かに於て靈感を経験してゐなくては駄目だ。基督教徒が迫害され虐殺された時代に基督教徒は道に逢つた時魚の形を路上に描いて暗號しあつたと云ふが藝術家も亦世間に知られない暗號を持つてゐる。一人の持つてゐる本當のものは他の一人の本當のものに感應を與へるものだ。他の一人に其準備がなくては感應が來ない。

自分は其事を知つてゐる。だから自分は世間に何の要求もせず、却つて遠くに知己を置いてゐる。その人々のみは自分を知つてくれると思つてゐる。世間が自分と同じやうな顔をしてやつてきても自分は貴様と自分とは違ふぞとも云はずニコ／＼してゐる。世間が自分を輕蔑してもニコ／＼してゐる。自分には思ふ所がある。自分が思ふ所を成就したら自分は神に決算して貰ふ。自分が頼る所は只一つ其處にある。世間は自分に淋しさをも嬉しさをも與へることは出來ない。(二九二〇・六・二〇)

偉大なる人

あゝ人

偉大なる人

心の深き人

彼何を云はずとも

人々打たる

彼何か云ふ時

人々の心に觸る

あゝ人

偉大になりし人

○

偉大なる人は

宛もたてる樹の如し

たゞ立てるだけにてすでによし

人々幹をめぐりて讃嘆し

見上げて悠々となり

楽しくなり

青空にそびわし枝には

無数の鳥を宿らせるなり。

○

我は彼と語らず

又逢はず

されどいかに常に彼を思へるかよ

彼は我を知らず

彼をおもひてはげめる事をも知らず

されどそれにて我はたのし

我は彼を知る

のちの日彼又我を見るべし。

○

わが慕へる彼よ

彼をみてわれは涙ぐみぬ。

久しく永く逢はざりし。
彼何事をなし
我何事をなせし
あゝ我何事をも常になさず
彼に逢ひて今涙ながせしのみ

○

彼歸る
われ彼を送らずして
彼歸る
神ともに彼とあれ
彼の仕事神と共にあれ

今は我をゆるせよ
われ彼を心にゑがき
つとめざらんや。(一九二〇・九・二三)

備考

一、本書に集めた詩稿は大正三年から大正九年迄のもので、順序が二三違つてゐるかも知れないが大體は製作順にした。年がかはる毎に目次を一行宛明けて置いた。

二、挿畫は皆油繪で製作年月は左の通りである。

風景（杉と茶畑） 千九百十六年十月作

野娘 千九百十七年九月作

少女肖像斷片 千九百十九年一月中作

暮春の景色 千九百十九年六月作

草枯れし監獄の横
静物

千九百二十年一月作
千九百二十年二月作

三、本集出版を勧め下されし足助氏並に出版を喜んで下さつた諸氏に對して、
未筆乍ら御禮申上ます。

大正十年一月廿八日印刷
大正十年二月三日發行

(定價金壹圓五拾錢)



著者 中川一政

發行者 東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
足助素一

發行所 東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
叢文閣
振替東京四二八八九番

印刷所

東京市京橋區南金六町十二番地
英文通信社印刷所
(印刷人) 望月精矣

